

竹富島調査報告レジュメ

2002.8.12(月)

大城由香利

1、テーマ：「竹富みんサー・島に住む若者たちの織りに対する意識」

2、テーマ設定の理由

竹富島には無形文化財の『種子取祭』をはじめ「結願祭」や「豊年祭」などの神に捧げる祭り、「まちなみ保全地区」にもなった赤瓦の美しい町並みなど、すばらしい伝統文化が今なお人々によって守られている。なかでも「織り」は、とおい昔から家族の健康と幸せを願いながら、糸を紡ぎ、織る、その原始的な手仕事は女性の仕事として位置づけられ、受け継がれ守られてきた。半帯、単名古屋帯、麻布、八重山交上、芭蕉布、グンポー、花織など竹富島は民芸の島とも称されるほどに多彩な織物があり、とくに『みんサー織り』のミンサーウは一時途絶えかけたが、島の一人の女性亀井カンツさんが細々ではあるが守り続けており、亀井さんを講師にむかえて若い織り手を育成し、外村吉之助氏や与那国清介氏をはじめ、様々な人々の努力によりミンサーウは復活した。しかし高齢化や過疎化によって竹富島でも島の約四割が高齢者で、このような伝統文化を伝承することはしだいに難しくなり、竹富島の織りであったミンサー織りも現在は島での生産は激減し、島外での生産が大きく伸びている。

そこで竹富島のミンサー織りの生産が現在に至った背景と現状を踏まえ、担い手となる島に住む若者たちの織りへの関わりや意識について探ってみたく、今回のテーマ設定とした。

3、島の織り手たち・・・(織り手たちの環境・島の現状)

現在竹富島に住む織り手は20名あまり。その多くは年配の方方で若い織り手は実に5・6人である。しかし、実際に織りをやっているのは常時3・4人で多くても6名程度で数えられるほどである。竹富島にある織り機の数37台、家に織り機を持っていてもなかなか手をつけられない状態であることが調査を進めるなかでみえてきた。

まず、織りだけに力をいれられるだけの時間がないこと。竹富島は美しい南の海にうかがぶ島で、豊かな自然環境や情緒ある島独特の雰囲気のある島であり、年々訪れる観光客の数もしだいに増え、夏には個人旅行者や家族、冬には団体旅行者と年中忙しい。それに対応するために民宿やレンタサイクルといった観光業に携わる家も同時に増えたため、観光客の対応をするだけで手いっぱい状態で、家に織り機があっても織る時間がないのである。織りたいと思っても仕事を抜けられるだけの人手も島には不足し、実際にピーク時には島外からヘルパーとして手伝ってもらってやっとの状態、現在の竹富島には織り手の方々が布を織れる程の余裕はない。島の土産屋に並ぶミンサー織りや上布も、その多くが島外から持ち込まれたものが売られている状態である。

4、竹富の織りを若者へ

昨年10月、種子取祭の芸能が披露される世待御獄の前に移った「たけとみ民芸館」では、竹富町事業共同組合の拠点として、竹富町事業共同組合理事長である島仲さんを中心に島に住む若者たちに織りを伝えながら、皆で学びあい、日々布を織りながら後継者育成に力をいれている。また去年(H13)には、島仲さんは内盛スミさん、内盛佳美さんと共に総合学習の一貫で、小学3・4年生に綿を育てることからミンサー織りまで講師として子供達に指導を行っていた。

5、竹富みんさーの歴史

インドで発生した緋が南方諸島を北上して、沖縄に入り鹿児島を通過して本土へ広まったと考えるのが一般的ですが、竹富島のみんさーは400年前遠く、アフガニスタン地方に源流をもつ小さな緋の帯がチベット、中国、を経て伝来したものと考えられている。歴史に登場したのは薩摩の琉球支配の前後から。薩摩の支配下で、人頭税制の締めつけはたえがたいのもであったようだ。

また、戦後竹富みんさー織りを織れる人物は一人(亀井カンツ)しか残っておらず、洋装の普及により滅びいく過去の衣服でしかなかった。1952年に竹富島を訪れた、岡山県倉敷民芸館館長の外村吉之介以下民芸運動家により「民芸の島」として、島の人々の「伝統文化」に対する新たな可能性を開くきっかけとなった。そして、1958年に女性たちによって講習会が開かれ、それまでの地機という地面に直接座って織る方式から椅子に座って織る高機へ移行し、その技術を習得していった。滅び行こうとしていた「伝統文化」が復活したのである。そして、人々は竹富町織物事業組合を結成し講習会を開催し、技術を広め後継者の育成を図っていった。時代の推移とともに一時期は消滅寸前であったが、みんさー織りが素晴らしい織りものであると認められ1960年頃から現代の暮らしに使えるみんさーとして、ネクタイやテーブルセンター、バックなどさまざまな物が創意工夫され、急速に普及していくことになった。

講習会の受講者は竹富島だけにとどまらず石垣島の人々にも拡大し、生産も次第に石垣島の大手の業者に移行し、沖縄県全体へと出荷するようになっていく。平成元年、伝統的工芸品として通産省の指定を受け、従来石垣市や竹富町で織られていたみんさー織りは八重山上布と共に国の伝統工芸産業指定を受け、通産省告示第184号により「八重山ミンサー」と呼称を統一された。従来通り竹富島で織られていたようなオサなしの手締めでは難しいということで、オサを使って織ったみんさーもみんさー織りとされた。こうして竹富みんさー織りの文様は八重山諸島を代表する八重山みんさーとなっていった。

6、アンケート結果

アンケートの調査対象は島内に住む20代と30代の方々。内容は竹富の織物をどの程

度知っているのか、身近なものであるか、これからどうしたいか等の意識調査を行った。

調査人数：20人 男性：9人 女性：11人

竹富の織物にはどんなものがありますか？

- ・芭蕉布 ・八重山上布 ・ミンサー帯 ・バシャシン ・グンボー
- ・絹芭蕉 ・綿ミンサー

竹富の織物が好きである理由

- ・記号かされていて単純で美しい
- ・幾何学模様は単純であるがけっして飽きがこない
- ・色・形と様々である
- ・素材の善さが生きていて、クラシックであるがハイカラ。
- ・生活の中から生まれたもので、意味がちゃんとあるから
- ・「いつ世、いつ世までも」の願いが込められて素敵
- ・魅力を感じる
- ・昔の人の想いが布から伝わってくるから
- ・色合いも、形もここの風土や自然と合っていて、自然となじむ感じが素晴らしい
- ・布に織り手の想いが生きていて、自然であり、ぬくもりを感じる

生活の中に織物がありますか？

- ・着物 ・敷物 ・小銭入れ ・バチ入れ ・のれん ・帯
- ・コースター ・洋服 ・テーブルセンター ・ショール ・財布

織物が身近であるかについて

身近である ・ ・ ・ 実際に織っているから

祭りなどの行事で身につけるから

島で生活しているから

妻が織物を実際にしているから

祖母や母が織り続けていたから

仕事であり、祭事に欠かせないもので、島の産業としても大切

以前織物をしていてから

普段の生活の中で使っているから

自分が織物を好きであるから

身近ではない ・ ・ ・ 織り上がったものは好きであるが、買うには高価である

織る事に関心はあるが、やっていこうとは思わないから

織った経験がまだないから
触れる機会が少ない

竹富島で織物を守っていくにはどうすれば良いか

- ・若い人が織りを習って伝統を守っていく(後継者育成)
- ・観光ガイドで観光客に織物の紹介をして深く知ってもらう
- ・毎日の仕事としてできなくとも、気分転換としてでも織りに皆が携わる
- ・もっとオープンなものとし、誰でもできるものにする
- ・たくさんの人々に知ってもらい、使用されること
- ・竹富島の織り手の人口をもっと増やす
- ・若い世代に引き継いでいく。まず興味をもってもらい、島全体の財産として島人全体で守る
- ・原材料の確保
- ・竹富島でもっと織りを盛んにして、島のものを島のお土産で売る
- ・お祭りでこれからも着続ける
- ・親から子へとつなげていく

存続するためにどのような関わりをもっていくか

- ・島に住み、自分で実際に生活のなかで使っていく
- ・織物が存続できるような環境づくり
- ・島の歴史等について具体的に子供たちへ話をしたり、教えたりして、島人としての誇りを持たせる努力
- ・自分がまず織り手として頑張り、自分と同世代またはもっと若い人々と、自分の関わってきた年配の人々との中継となる
- ・織ることは苦手なので、売るほうでやっていきたい。お客が好むものを考えたい
- ・織物の意味、歴史をもっと勉強する
- ・織れないので自分でも織れるようになって、祭りで着たい
- ・これからも自分のペースでゆっくりのんびり織っていく

6、調査を終えて・若者の声

今回の調査を通し、竹富島に住む若者たちの織りに対する意識を実際に知ることができたように思う。島内、島外の出身を問わず、島の若者が竹富の織物をそれぞれの受け入れ方で、生活の中に感じていることに竹富の文化の伝承を感じた。

アンケート結果に加え、若者の声に次のようなものが上がっていた。

- ・観光土産ものでにせものがでまわっているが、ちゃんと規制する必要がある。竹富島の文化であり、国の文化でもあるのだから国にもっと力をいれてほしい

- ・ 伝統としてそのままの形で守っていくのか、また守ってだけで良いのか。伝統文化を商業的な目的、産業としていきたいのか、いずれにせよ今の竹富島には、もっと大きな力(人力・資金等のいろいろな意味での)が必要である。
- ・ 竹富島の文化、歴史が好きなのでこれからの学びながら関わっていきたい。
- ・ 現在の竹富島は織り手が不足していて、このままでは竹富島の織物は無くなってしまふかもしれない。民芸館も新しくなったのに機を織るのは数えるくらいで、もっと皆で考えていかなければならない問題である。
- ・ 子育てが落ち着いたらまた織っていきたい。
- ・ 織物は趣味でするもので自分は仕事にすることはできない。

織り手の減ってしまったことと、織り手のほとんどが兼業者であることが竹富町事業共同組合の悩みであるが、上布やみんさー織りの後継者育成において、指導のために一日かけて各島々に出向いたり、各島々で織った布を納めるにも、離島という環境の中での不便さを依然抱えている。また、指定をうけたことによる合格の難しさもでてきた。できることならば島のお土産店に並ぶ織物だけでも、島で織られたものであれば良いなど誰もが願っていることである。今回の調査で竹富島の若者の織物に対する意識が、島の生活の一部であるほど自然に受け止めていて、馴染んでいることもわかった。このような活力のある若者がもっと島に増え、織りへの参加が実現できれば、今現在抱えている諸問題もすたいに解決され、純竹富島産の織物でお土産屋をいっぱいにする日もそう遠くないのかもしれないと感じた。そのためにももっと島全体で、竹富島の織物を広くアピールし、実際に織りにもできる限りの参加と、親から子へ守り受け継ぐことが大切ではないかと思う。